

図書・動画・映画から学ぶ教師の英語

Learning to Teach English in English through Books, Videos and Films

福島美枝子

FUKUSHIMA Mieko

Abstract

This study examines several types of language resources for Japanese teachers of English engaged in elementary and secondary school education, in regard to teachers' verbal actions in English in the classroom. These resources include handbooks for classroom English, teachers' resource books for elementary school English, an autobiography of a famous scientist, DVDs, videos, and films. The study discusses in an explanatory manner how these types of resources might be used by those non-native teachers who are making efforts to develop their abilities to teach English in English. Little research has been conducted in Japan to look into how Japanese teachers of English have actually been developing their abilities to conduct instruction in English and also their English proficiencies as the basis for teaching. The present study assumes that in order to make best use of the above-mentioned resources, teachers' active and long-term involvement in learning and acquiring linguistic items as well as incorporating classroom activities is of vital importance.

キーワード：英語で英語を教えること，教師の英語，多様な言語資源，
図書・動画・映画，教師のアクティブラーニング

1. はじめに

外国語の教室で教師が目標言語を使って生徒とコミュニケーションを行なうことの重要性やそのコミュニケーション及び言語の質に関する研究が多く見られる (e.g., Bolitho 2008, Lei 2009, Inceçay 2010, Hirschel 2018)。日本の英語教育においても、教師が自身の英語力を伸ばし、英語で英語を教える力量を身につけていくべきであることに変わりはなく、最も新しい分野である小学校の教科としての英語教育においても、小学校教職課程において新設される「外国語」及び「外国語教育法」のコアシラバスを通して、英語の4技能、英語に関する言語学的知識、子ども達に英語で話しかけ子ども達から英語の発話を引き出す指導技術などの育成が求められている。

日本のような外国語習得の文脈、すなわち身につけようとする言語がその社会や国の言語ではない文脈では、目標の言語をマスターするには一般的に長い年月を要すると考えられる。加えて、外国語の教師になった人達は、同様に長期の努力を通してその外国語で授業をする力を身につけることになる。既存の研究を見ると、日本の英語教師や小学校教諭が自身の英語力に関して持っている意識を調査した研究はある。しかしながら、教師が実際に英語で授業を行なう力を身につけるために使った習得方法に迫る研究も、実際に授業の中で教師がどのような言語行動をしているのかを観察し分析した研究もまだ少ない。そこで、日本人英語教師による英語力獲得のプロセスというテーマで一步研究を進めるために、私自身の英語教師としての学びの経験に基づき、本研究において教師にとって有用な言語資料を考察してみたい。

ここで取り上げる資料は大きく分けて2種類ある。文字で書かれたものと映像で示されるものである。前者はさらに3種のものを照らしてみたい。教室英語のハンドブック、小学校英語のための教育実践用図書、教育者の自伝の3種である。後者も3種取り上げてみたい。DVD、動画、映画の3種であり、口頭で示される言葉を文字化して考察する。いずれの資料も、教師の英語習得においていわゆる“language input”（言語インプット）として使い得るものである。これらを活用できるかどうかは、教師自身のレディネス、意欲、そしてアクティブな習得プロセスにかかっていると考えるとよいだろう。具体的な資料を個別的に吟味する中で、それらが言語資料としてだけではなく、教室での活動の形に関しても参考になることを示してみたい。

2. 教室英語のハンドブック

教室英語 (Classroom English) というのは、1時間の授業の指導手順を滞りなく行なうために必要な英語のことであり、「授業の開始」、「授業の終了」といった事項を代表とするいくつかのカテゴリーを設定して体系的に教師の言葉を分類した本を本稿でハンドブックと呼ぶ。数多くの文例が示されている本である。次頁と次次頁に掲げる表1と表2で4冊の例を挙げ、そこで扱われている事項を引用してみたい。英語で書かれている Hughes (1981) 以外は日本語と英語の対訳版である。染矢 (1994) に関しては紙面の関係で大カテゴリーしか示すことができないが、索引も入れれば707ページにも及ぶ事典であり、一つの日本語表現に対して複数の英語表現が示されていることも特徴である。山崎 (2017) はこれらの中で唯一小学校の教師向けに書かれた本であり、その出版自体が最近のこの分野の発展を示している。表2に示す曾根田とパーキンスの本 (2002) は、日英両言語でカテゴリーが示されている。学校関係の様々な話題や多様な趣味等を扱っていることも特徴的である。

こうしたハンドブックは、英語を英語で教えることに乗り出そうとしている若手の教員に有用であり、年齢に関係なく自身が生み出した表現に自信が持てない場合にこうしたハンドブックでチェックしてみることも有益であろう。自身の必要とする表現が意識できさえすれば習得は容易であり、一旦正確に覚えたものは確実に使えるようになると考えられる。それだけ、掲載されている文の殆どが覚えやすいシンプルなものである、という見方もできる。しかし、知らなければなかなか口から出てこないのである。例として、私はかつてグループワークを英語の授業に取り入れ始めた頃、上記の Hughes のハンドブック (1981) から “Put your desks together into groups of four.” を学んだ。言われてみれば「ああそうか」と思えるような表現だが自力では出

てこない、ということはノンネイティブの英語教師にはありうることだ。しかし、一旦覚えて使うようになればもう忘れることはなく、確実に自分の言葉にすることができる。

表 1

Hughes, Glyn S. (1981)	染矢正一 (1994)	山崎祐一 (2017)	
・Getting Things Done in the Classroom	I. 始業	【ミニフレーズ編】	8. フォローする
・Asking Questions	II. 授業以前	1. 授業を始める・終わる	9. 意見・発表
A. Beginning of Lesson	III. 授業活動	2. 指示する・指導する	10. 授業中の行動
B. End of Lesson	IV. 授業内容	3. 励ます・フォローする	11. ペア・グループ活動
C. Set Phrases	V. テスト・試験	4. 活動・アクティビティ	12. カードゲーム
D. Textbook Activity	VI. 生徒とのコミュニケーション	5. 四技能の指導	13. 道案内
E. Blackboard Activity	VII. 終業	6. 生活について話す	14. 読む・書く
F. Tape Activity	VIII. 米国人教師の英語	【ダイアログ編】	15. ほしい
G. Slides, Pictures, OHP	表現事例	1. 授業を開始する	16. 好み・したいこと
H. Games and Songs	IX. 関連語集	2. 天気・曜日	17. 生活について
J. Movement, General Activity		3. 授業を終える	18. 日本について話す
K. Class Control		4. おさらい	19. 思い出
L. Repetition and Responses		5. 休み明け	20. 職業・将来の夢
M. Encouragement & Confirmation		6. ほめる	学校・授業でよく使うキーワード
N. Progress in Work		7. 励ます	ミニフレーズ INDEX
P. Language Work			

ハンドブックからの吸収率を上げるためには、教師が自身の弱点や教室での言語的ニーズを意識するようにすることだ。逆に、ハンドブックの包括性を利用し、普段自身が使っていないタイプの表現に気付くことも重要であり、それが授業改善につながることもあるだろう。例えば、Hughes (1981) の中にある “I’m afraid that’s not quite right, because ……” によって、生徒が示したものの婉曲的で合理的な反応の仕方を学べるし、“Which topic/subject would you like to work on?” を知れば、自身が普段生徒の教室での行動にあまり選択肢を与えていないことに気付くかもしれない。

ハンドブックの効用は、教師自身の授業実践に必要な具体的な表現をひとつずつピックアップして身につけていくことだけではない。表現したい意味を、一文だけではなく他の文でも言えるようにする、そういう意味でレパートリーを増やすことも可能である。例えば、染矢の事典 (1994) には、「宿題はやってきましたか。」の意味に対して過去時制の “Did you do your homework?” と現在完了の “Have you done your homework” が示されており、さらに動詞に finish や complete を使う例も提示されている。また、普段始業時に “Let’s start.” とか “Let’s begin.” と言っている教師は、上記のいくつかのハンドブックから “Let’s get started.” という表現を学ぶこともできる。また、「前に来なさい。」と言いたい時に、“Come up.” とか “Come to the front.” とも言えるようになるだろう。

表 2

曾根田憲三 & Perkins, Bruce (2002)	
1. あいさつ Greetings	30. 服装 School Uniforms
2. 出欠状況 Attendance and Absence	31. その他の校則 Other Regulations
3. 休講 Cancelling a Class	32. 入学試験 Entrance Exams
4. 教科書 Textbooks	33. 卒業する Graduate
5. 英語に関する質問 Questions about English	34. 学校制度 Japan's School System
6. 質問 Questions	35. 学校 Schools
7. 宿題 Homework	36. 学校の歴史 School History
8. プリント Printed Material	37. 教育目標 Educational Goals
9. リスニングの授業 Listening Class	38. 自己紹介 Introductions
10. 授業中の注意と指示 Warning and Instructions	39. 私の性格 My Character
11. 教室を出る許可を得る Permission to Leave	40. 体質と癖 Describing Myself
12. 英語について About English	41. 将来の夢 My Dream
13. 生徒からの質問 Question from Students	42. 趣味は音楽 My hobby is Music
14. 試験について Exams	43. 読書 My Hobby is Reading
15. 試験の結果 Exam Results	44. 映画鑑賞 My Hobby is Watching Movies
16. 成績 School Grades	45. コンピュータ My Hobby is Computers
17. 英語の授業について Talking about English Class	46. 写真 My Hobby is Taking Pictures
18. 教師について Describing Teachers	47. 絵画 My Hobby is Painting
19. 授業科目について School Subjects	48. 旅行 My Hobby is Traveling.
20. 学習 Studying	49. コレクション My Hobby is Collecting Things
21. 英語の勉強 Studying English	50. 園芸 My Hobby is Gardening
22. クラスについて Classes	51. その他の趣味 Other hobbies
23. 職員会議 Teachers' Meetings	52. スポーツ Sports
24. 時間割り Class Schedule	53. ペット Pets
25. 昼食について My Lunch	54. 携帯電話 Cell Phones
26. 学期について School Year	55. ファッション Fashion
27. 休みについて Vacations	56. 交際 Personal Relationships
28. 学校行事 School Events	57. 家族 Family Ties
29. クラブ活動 Club Activities	58. 私の住んでいる場所 The Place I Live In

最後に、具体的な例文をひとつひとつ覚えていくことに加え、前述の Hughes (1981) が最初の2つの章で取り上げている学び方も有益であることを指摘しておきたい。ひとつは、指示を与える、依頼する、提案したり説得したりする、といったコミュニケーション上の機能に焦点を当て、各機能を果たす複数の言語形式に馴染むことである。もうひとつは、生徒に対して質問が流暢にできるようになることである。質問はコミュニケーションに欠かせないものであり、教室の

中で教師が自然に質問をすることで生徒自身も質問をすることを覚えていくのではないだろうか。

3. 文部科学省「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」(2017) と音源

小学校英語の発展のために、2017年に文部科学省によって包括的な「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」が発行された。その中のひとつの章が小学校教員の英語力の育成のために割り当てられており、CD 及び YouTube MEXT channel によって音源も与えられている。

英語力育成は5つの部分に分割されている。教室の授業の様々な段階や側面で教師が用いる多様な表現を意味する「クラスルーム・イングリッシュ」、教師の短いスピーチや生徒の学習目標となる会話パターンを示す「スモール・トーク」、ALT と会話し、教育的な諸々の事柄を話すのに必要な語彙を集めた「基本英会話」、音素を扱う「発音トレーニング」、そして基本的な英語のリズムやイントネーションを訓練する「スピーキング・トレーニング」である。

これら5要素の中から「クラスルーム・イングリッシュ」に焦点を当ててみると、授業の開始、いくつかの授業中の活動種、授業の終了、褒めること、励ますことなどを含む13の項目に分類しており、それぞれに4文から6文程度の例文が挙げられている。それら例文を合計するとかなりの数にはなるが、単純な文の集まりであり、私の教育経験によって判断すれば、小学校教職課程で学ぶ学部生がそれらをすべて覚えて使えるようにすることは、それほど難しいことではないように思われる。

以下、13項目の中から4項目を選び、提示してある例文のリストを示してみたい。カードゲーム、聞く活動、クラスコントロール、励ますことの4項目である。

Card Games

- (1) Take out your cards.
- (2) Put your cards face up/down.
- (3) Turn over your cards.
- (4) Deal the cards.
- (5) Shuffle your cards.
- (6) Take one card.

Class Control

- (1) Can you help me?
- (2) Open your textbook to page 6.
- (3) Turn the page.
- (4) Point at the picture.
- (5) Can you find the dog in this picture?
- (6) Do you have this worksheet?

Listening Activities

- (1) Listen to the CD.
- (2) Let's listen to Suzuki-sensei.
- (3) Can you hear me? / Can you hear the CD clearly?
- (4) Listen carefully and connect the dots.

Encouraging

- (1) Don't give up.
- (2) Don't worry.
- (3) Nice try! / Good try!
- (4) Once more. / One more time. / Try it again. / Say it again.
- (5) Close! / Almost!
- (6) Good luck! / Do your best.

4. 小学校英語のための教育実践用図書

日本における小学校英語の導入は、検討が始められたのが1980年代の半ばであり、実際に学校に導入する試みは、全都道府県を対象として少数の研究指定校を設ける方法で1990年代に始まった。2000年代になると、まずは総合学習の選択的な要素として外国語の活動が行なえるようになり、やがてその実施校が増える中で2010年代には「外国語活動」が5～6年生の必修領域となり、最新の変化として「外国語活動」は3～4年生に下り、5～6年生には新たに「外国語」が必修教科として設定された。この30数年の歴史の中で、数多くの実践報告書や教育実践用図書が日本国内で出版されてきた。ここでは2010年代に出版されたものを中心に教師の英語に関して扱っている部分に注目してみたい。

最初の図書は、吉田研作監修の『小学校英語のための英語ゲームはこれだけ！』（2010）である。この本には、6つのゲームを行なう教師と子ども達との英語によるやりとりが日本語訳付きで収録されており、教師の英語の中から抜き出されたいくつかの「キーセンテンス」が各単元の冒頭にまとめられている。加えて、教師が少人数の子ども達と実際にそれぞれのゲームを行なう様子がDVDに納められているので、その映像を見ながら音声のみで教師の英語や子ども達の反応を学ぶことも可能である。教材として絵カードも添えられている。

次は、各ゲームで指定されている「キーセンテンス」のリストである。

Fruits basket

- (1) What color do you like?
- (2) Let's make a circle.
- (3) Today's topic is color.
- (4) Any volunteers?
- (5) Get up and move!

Bingo

- (1) How many pencils?
- (2) Take one each.
- (3) Let's play bongo.
- (4) Draw a circle.
- (5) If you get a line, say "Bingo!"

A missing game

- (1) What's missing?
- (2) What do you want to play?
- (3) Do you want to play the triangle?
- (4) Close your eyes. / Open your eyes.
- (5) Come up to the front.

Gesture game

- (1) Where are you?
- (2) Choose one card.
- (3) Raise your hand.
- (4) Are you ready?
- (5) Go back to your seat.

3-hint game

- (1) What's this?
- (2) That's right.
- (3) I'll give you three hints.
- (4) Look at me/us.
- (5) Give him/her a big hand.

Interview game

- (1) Write your name.
- (2) What time do you get up?
- (3) How about you?
- (4) Your turn. / It's your turn.
- (5) Make pairs. / Make groups of four.

他に3冊の図書を見てみたい。いずれも先行研究 (Fukushima 2015) において吟味した教師用参考書の一部である。本稿ではこれまで主に単文のコレクションを見てきたが、ここからより長い形で、教師と児童のやりとりや教師の語り聞かせを扱う。

秋田裕子 (2011) は、2003年から東京のある公立小学校で地域人材として英語活動に従事し、出版時には市のコーディネータとして小・中学校の教員の支援に当たっていた。この図書の中心部分には、5~6年生を対象として11の単元とハロウィーン及びクリスマスに関するセクションが設けられ、単元の目的、授業のチェックポイント、基本的な活動に関する指導手順などが記述されている。

次は、「色形神経衰弱ゲーム」というゲームの一部である。黒板上に縦3マス、横3マスで計9つのマスが2組作られており、それぞれ9種の動物が隠されている。縦の列と横の列にそれぞれ特定の形と色のカードが置かれていて、英語で「赤い丸、黄色の三角」というふうに言ってそれらの列が交差するところにある動物を問題にすることになる。最初の児童が左側のセットで指示したマスにはウサギがいた。次の児童は右側のセットでウサギのマス当てたいわけだが、下の例ではパンダのマス当ててしまった。

- Teacher: (pointing to the left hand set of cards on the board)
Where do you want to open?
- Student 1: Red circle and yellow triangle, please.
- Teacher: OK. Let's open. Oh, it's a rabbit. (pointing to the right hand set of cards)
Where do you think the rabbit is?
- Student 2: Blue heart and purple square, please.
- Teacher: Here? Let's open. Oh, I'm sorry. It's a panda. (p. 51)

ここで着目しておきたいのは、この例に示唆されているように、教師が発問できることだけではなく、児童が英語で教師の質問に対応できることが重要である。上の例であれば、子ども達が色や形の言い方や動物の名前に馴染む時間が一般的にはゲーム実施に先行して設けられるはずである。

小泉清裕 (2011) は、5~6年生の2年間のコース案を提示している。テーマに基づく内容重視のアプローチであり、小泉自身の専門知識と英語の流暢さと相まって、教師が使える英語の諸例も各単元にまとめられている。次のようなユーモラスなやりとりも見られる。

- Teacher: What color do you feel today?
Gray? Why?
Oh. You forgot your homework. (p. 20)

熊本大学教育学部附属小学校 (2011) は、3年生から6年生までを対象にして実際に行なわれた英語活動の報告書、24のゲーム、年間指導計画書、各週の指導案などを収録している。英語活動には、現在では全国的にはあまり行われなくなっている英会話プログラムの校内放送なども盛り込まれており、次のような児童に向けたALTの語りも垣間見られる。活動を円滑に行なわせ

るために教師の指示語や褒めことばだけが注目されがちであり、この例に見られるような教師の語りかけの重要性が忘れられる可能性があることを指摘しておきたい。

Teacher: At the weekend, the weather was fine, so I opened the windows and cleaned my house. I like cleaning. Do you like cleaning? First I used the dust cloth and then ... (p. 20)

海外で出版された図書にも有益なものがある。Slattery M. and J. Willis (2001) は小学校教師の使う英語をテーマにした本であり、翻訳書も出版されている。この本の中には、世界の様々な地域で記録された実際の教師と子ども達とのやりとりが数多く掲載されている。次の例は、子どもの名前から判断して日本からのデータ、あるいは日本人の子ども達がいる教室で採られたデータではないかと思われる。ペアになって言葉のやりとりを通してそれぞれが持っている絵の中にある違いを当てるといった活動である。日本語では「まちがいさがし」と呼ばれているが、英語では“Spot the difference”と言われる。

Teacher: Then I want you to do pair work. I prepared two pictures A and B. OK, so please don't show your pictures to your partner. OK? sh...sh...

先生は各ペアに絵を配る

OK, everybody, everybody.....there are four differences. There are four differences in the pictures. So please talk about the picture and find out what the four differences are. OK?

Saori: A boy is riding a bicycle.

Hiro: No. A boy is playing soccer.

ここでも、活動の主体は児童であり、児童自身が英語で十分にやりとりができるように促していく必要がある。

5. 自伝的読み物

ノーベル物理学賞の受賞者であるファインマンの自伝 (1985) は、大人の読み物としてだけではなく、大学生の英語リーディングのクラスでも使える面白い内容の図書であり、私も教科書として使ったことがあるが、この自伝において初めて授業の始め方に、それも印象的な始め方に遭遇した。それが出てくる文脈はこうである。ファインマンは、或るバーのトイレでやった喧嘩のために翌朝目が青黒く腫れあがり、その顔で大学の授業に臨まなければならない。その時のユーモラスな描写を、大貫昌子の翻訳 (1986) を併記して示してみたい。

Then there was the problem of giving the lecture to my regular class. I walked into the lecture hall with my head down, studying my notes. When I was ready to start, I lifted my head and looked straight at them, and said what I always said before I began my lecture—but this time, in a tougher tone of voice: “Any questions?”

(Feynman 1985, p. 162)

困ったことにそれから授業をやらなくてはならない。僕はうつむいてノートを読むふりをしてながら教室に入っていったが、いよいよ講義を始めるとき、顔をあげて学生どもをまっすぐ見据えた。そしていつも講義をはじめの前に言う文句を、今日は特にドスの利いた声で言ったものである。「エニ・クウェスチョンズ？（何か質問でもあるかね？）」

(大貫昌子訳 1986, pp. 286-287)

現在、ファインマンのように「何か質問がありますか。」という言葉から授業を始める教師がいるのかどうかは定かではないが、前回までの授業内容の復習や今回の内容の予習をしたり、この授業で扱われているテーマや問題に関して普段から考えたりしていなければ、学生として授業冒頭のこの教師の問いかけに誠実に応えることは難しい。そういう意味で、受講というものの基本姿勢を促す言葉であると言うことができる。

ファインマンは、この自伝において、大学教師としての自らの経験や考えも述べている。或る節では、教育活動が科学者としての自身の人生にとって心理的な支えのようなものになっていることを冒頭で語った上で、授業内容に関して次のように述べている。

If you're teaching a class, you can think about the elementary things that you know very well. These things are kind of fun and delightful. It doesn't do any harm to think them over again. Is there a better way to present them? Are there any new problems associated with them? Are there any new thoughts you can make about them? The elementary things are *easy* to think about; if you can't think of a new thought, no harm done; what you thought about it before is good enough for the class. If you *do* think of something new, you're rather pleased that you have a new way of looking at it.

(Feynman 1985, p. 150)

授業をもっている場合には、自分で良く知り尽くしている初歩的なことを考えることができるし、これがけっこう楽しいものだ。そうしてこういう初歩的なことを改めて考え直してみるのだって、決して悪いことではない。この教え方を何とか改善できないものかとか、これに関連して何か新しい問題でもあるだろうか？またそれについて新しい考え方が浮かんでこないかな？などと考えることはいくらでもある。しかも初歩的なことを考えるのは、しごく楽だし、たとえ何も新しい考えが浮かんでこなかったって慌てることはない。以前考えたことだけでも授業にはちゃんと役に立つのだから大丈夫だ。その上何か新しいことでも考えれば、その問題の新しい見方ができたことになってますます愉快だ。

(大貫昌子訳 1986, p. 262)

さらに、学生から受ける刺激に関する次のような記述もある。

The questions of the students are often the source of new research. They often ask profound questions that I've thought about at times and then given up on, so to speak, for a while. It wouldn't do me any harm to think about them again and see if I can go any further now. The students may not be able to see the thing I want to answer, or the subtleties I want to think about, but they *remind* me of a problem by asking questions in the neighborhood of that problem. It's not so easy to remind *yourself* of these things.

(Feynman 1985, p. 150)

また、学生の質問が新しい研究のきっかけになるというのはよくあることだ。自分でも以前に考えてはみたけれど、いったん解決をあきらめた形になっていたよう深遠な問題を、学生はよく持ちだしてくる。そういった問題をもう一度考え直して、今ならもう一歩進めないものかどうかためしてみるのも決して悪いことではない。学生は僕が答えをだしたいと思っているような問題をほんとうには見通しておらず、僕が考えたいと思っている微妙な点を理解して質問したわけではないかもしれない。それでもなおこういった問題の近くをつつくような質問をしてくれれば、こちらはそのことを「思い出せる」というものだ。こういうことを自分で自分に思い出させようたって、そう簡単にはいかないものである。

(大貫昌子訳 1986, p. 263)

前節で見たように、文部科学省の「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」(2017)には、ALT と会話し、教育的な諸々の事柄を話すのに必要な語彙を集めた「基本英会話」という部分がある。上記のようにファインマンが教育について語っている箇所に耳を傾けるのは、いわばその上級編と言っても良いようなコミュニケーションになる。また、上のファインマンの英語は、日本人教師である私達が自らの教育に関する考えを英語で発信するための参考資料として活用することもできる。教育観の交換は、外国語の教師の間の相互理解だけではなく、もっと一般的な教育者間の国際コミュニケーションももたらす。それによって類似する考えに気付かされることもあれば、教育面での文化差に思いが及ぶこともあるだろう。

6. 大学生のための短期海外研修から得られる動画

富山国際大学子ども育成学部では、春季休暇を利用してカナダで2週間の研修プログラムを実施している。そのプログラムの一環で行なわれている協定校での英語の授業の様子を覗いてみた。かつて小学校の教頭先生をしたこともある女性教師の授業である。私が撮影と教師の英語の文字起こしを行ない、私の同僚(英語のネイティブスピーカー)にチェックを依頼し、修正すべき箇所を指摘してもらった。以下、修正後のスクリプトの中から、教室での異なる種類の活動に関わる教師の発話例を示したみたい。

【授業の始め方を工夫する】

まず、前日の出来事について語った後で今日のスケジュールの説明に入るという手法が見られた。教室英語のハンドブックに数多く盛られている単文と比較すると、とても長い、先生からのお話である。ここで教師が取り上げている前日の学生達の出来事というのは、ENMAX というアリーナで行われたアイスホッケーの試合のことであり、地元チームのハリケーンズが他の地域のチームに勝ったのは、地元開催という有利さがあったからだということを教師は伝えようとしている。

Teacher The team has an advantage. It's called home team advantage, because they're playing at home, and many of the people who come to watch the game, many of the fans, they are fans of the Lethbridge Hurricanes. There are other people cheering on the other team, but most of the fans, most of the people who go to the Lethbridge game at the ENMAX, most of them are Hurricane fans. So, when a team is playing in their hometown, they have all these fans who are cheering, they're like "Woo, woo, Hurricanes, yeah, go, go!" So that gets them pumped up, "Oh, yes, yes." So, it's hometown advantage. They have their fans there, maybe friends and family.

Student 1 What does "advantage" mean?

Teacher What it means is that, to explain is difficult, if I was going to have a conversation about Japan, say, "sushi," and I was having a conversation with one of you, you would have the advantage because you know more about "sushi" than I do. OK? (in a lower voice) I don't like sushi, I don't eat sushi, but you would have an advantage. Because I am, my first language is English and we are having a conversation in English, I have an advantage.

Student 2 Yeah, yeah.

Teacher It's kind of like that. The same thing is true if you have whether it's a hockey game, or a soccer game, or a football game, it doesn't matter. If you have 2 teams, the team that is the home team and they are playing in their home city at the same arena. Because they know the ENMAX, they practice at the ENMAX Center, they play many games at the ENMAX Center, they know that they're comfortable there. And all the fans who are visiting or who are there to "Woo woo Hurricanes," they support the Hurricanes. So they have an advantage. The visiting team, maybe they are only playing at the ENMAX Arena, maybe 2, 3, 4, 5 or 10 times, but never practicing there. And maybe they have some fans who have come to support them but the number would be small. So when you, the Hurricanes have home ice advantage. Home ice, ice is what they're skating on. They know what it's like. They know the feeling of the building. It's very, very familiar. OK? Good, good question, excellent.

Student 1 Thank you.

Teacher So today, we are going to do a couple of different things. The first thing I want to do with you.....(taking out her notes on schedule).....I'm going to put it on the board very quickly. We're going to do some work with our journals. We're going to do some information with new vocabulary. We're going to talk about something new called Ah Counter. We're going to work on your presentations and your daycare practice. OK? That's our schedule, our agenda today.

このような長さや質を持つ語りは、殊に高校生や大学生には十分な価値があると思われる。上の英語に見られるような質と量が、ノンネイティブである私たちにも身につけば、生徒や学生にとって有益な言語インプットになるだろう。

【ゲームのやり方を説明する】

次に見られたのは、ゲームのやり方の説明である。教師から話をしてもらった事柄について教師から投げかけられる質問に対して、各チームが小さいホワイトボードに答えを書き、それを教師に見せに行くというゲームである。教師はまず点の付け方を説明し、教師が10数えるうちに答えを出さなければならないことを伝え、最後に5人の2チームでやるのが良いか、それとも2人の5チームにするのが良いか尋ねている。実際には後者の方が選ばれた。

Teacher: The first team to get the correct answer will get 2 points. If the other teams get the correct answer, they will get 1 point. If the answer is incorrect, it's a mistake, it's wrong, zero point. OK?

You do not have a long time to think about your answer. You have to be quick. Maybe I will count one, two, three, to ten. When ten is up, the count gets ten, writing is finished. OK? Understand?

Do you want 2 teams with 5 people, or 5 teams with 2 people?

【学生のジャーナルライティングへのコメント】

最後に注目したいのは、教師がフィードバックのコメントを与えることを忘れないという英語圏らしい性質である。殊に以下のような良いコメントを自然体で誠実に話されたら、学生の心に響くだろう。この教師の推測通り、学生達は日本の所属大学で様々な科目の毎回の授業の中でたくさん書く機会を与えられており、英語による言語行動にもそれが発揮されたと考えられる。

Teacher: One of the things I really notice with this group, as I said, is the detail you put into your journals. Many of the other groups I had in the past don't do that. And we keep talking, talking, talking and talking, but you guys are

already doing it. So I don't know if that is the result that you keep journals back home, is it the result of your writing about your experiences in some of your classes. It's really great.

7. 映画

本稿では、教師が主人公となっている映画を取り上げ、教室の内外での教師と児童のやり取りを調べてみた。ひとつは、トゥーレット症候群の青年、Mr. Cohen が教職に就き、州の年間優秀初年教師に選ばれるまでの話を描いた *Front of the Class* (2008) という映画である。もうひとつは、24歳の女性教師 Stacey がシェルターで暮らす人々の子どもを教える仕事に奮闘する姿を描いた *Beyond the Blackboard* (2011) というテレビ映画である。以下、教師または英語教師として活用できそうな部分を以下に引用してみたい。文字起こしに関しては、前者はインターネット上に掲載されているスクリプト¹⁾ を利用し、後者は該当部分を私が文字に書き起こし、前述のネイティブスピーカーの同僚にチェックをしてもらった。

(1) *Front of the Class* (2008)

Mr. Cohen は、次の場面で、読むことが嫌いだという Thomas に、トゥーレット症候群の自分がものを読むというのはどういうことなのかを、音や動作で示しながら伝えようとしている。

Mr. Cohen: You can't read it if you don't open it, Thomas.
 Thomas: I hate reading.
 Mr. Cohen: So do I.
 Thomas: You do?
 Mr. Cohen: Yeah. Reading's really hard for me.
 Thomas: It's not hard for you. You're a teacher.
 Mr. Cohen: You wanna bet? Let's play a game. You be Mr. Cohen trying to read and I'll be Tourette Syndrome. OK? Read this page.
 Thomas: "Once upon a time"
 Mr. Cohen: Keep reading.
 Thomas: "...upon a time, there was a" That itches.
 Mr. Cohen: Does it itch a little bit? All right. Keep reading.
 Thomas: "...there was a..."
 Mr. Cohen: Hey, Thomas! All right. That's hard, isn't it? It's hard to concentrate. That's how hard reading is for me. It's not that hard for you, is it?
 Thomas: No. It's easy for me. But...how can you be a teacher if you hate books?
 Mr. Cohen: Hate books? I don't hate books. Everything in the world is in books. I just have to work extra hard to get it out. I'm not going to give up on you, buddy. OK? And I'm not going to let you give up on yourself. Now keep reading. Right here.

(2) *Beyond the Blackboard* (2011)

この映画には、引用したい箇所が何カ所かあった。いずれも伝統的な教師の行動と言えるものが表れている場面である。

【遅刻をした児童に注意をする】

まず、始業に遅刻をした複数の児童に注意を与える場面である。帽子を脱ぐように促したあとで “Thank you.” と言っているのは英語らしい。

Stacey: Please try to be on time. It's disrupted the rest of the class. Please take off your hat, Danny. Thank you.

【宿題を出したり、テストをするとき】

次は、宿題に関する確認や、テストに関する発言である。

Stacey: Did you understand everything you need to know to do your homework?

Stacey: What I want you to do is to write your name at the top of the test and answer as many questions as you can. I created this test to determine your grade level. So, it is very important.

【ディスカッションを通して語彙（形容詞）を学ぶ～母語話者の小学生への授業】

最後は、ディスカッションの場面である。respectful であるというのはどんな意味なのかとの教師の問いに、一人ずつ発言していくというものである。何人か発言したあとで教師がまとめの言葉を言い、問題にした言葉（形容詞）をカードに書いて黒板に貼るのである。respectful のあとは、せりふこそ出てこないが、新しい単語が書かれたカードが次々に黒板に貼り付けられるので、ディスカッションが続いたことが示唆されている。貼り付けられた数多くの単語（形容詞）を見てみると、日本で言えば「国語」の授業のようであり、外国語として英語を学ぶ日本の子ども達が接する英単語よりレベルは高く、その上に、教師による発問から出発して児童や生徒がそれぞれの考えを述べる伝統的なディスカッションの形態が活かされている。

Stacey: So, we are going to do a little bit differently this week. We are going to start by talking about anything that is important to you. But only one person speaking at a time and everyone in the circle has to be polite. Everybody, agree with those rules? Raise your hand. OK, good. So, I would like to start by talking about last week. Last week I lost my temper quite a bit, and it wasn't respectful. Maybe we should talk about that, what it means to be respectful. Yes, Angel.

Angel: Like you don't get in somebody's face. Blah, blah, blah, blah. Like that. Like you are messing with somebody.

- Stacey: That's right. That's not respectful. Sam.
- Sam: I don't think it's good to yell.
- Stacey: Right. Yelling is not good. I'm very sorry for yelling.
- A boy: I don't think it's right to do something over and over like messing with somebody or not listening.
- Stacey: You're right. See, we have to be respectful of our fellow classmates because you want to have a safe, quiet, calm learning environment, right? That's our first word. It's a descriptive word. An adjective. (writing the word on a card and showing it to the students) "Respectful." Grace, do you want to pin it on the board? Thank you.

この場面の活動を日本の英語教育に活用するためには、児童生徒が扱い得る言語レベルを考えなければならないが、形容詞の意味を児童や生徒がともに自身の経験に基づいて考え、話し合うという知的な手法は、日本の英語教育においても有益ではないかと思われる。

8. まとめ

英語を使って国際的なコミュニケーションを行なう力も、英語で英語の授業を行なう力も、一朝一夕に身につくものではない。本稿では、ノンネイティブの英語教師である私達が普段教室で使う英語をより豊かなものにするために有用と思われる図書、動画、映画を検討してみた。特に、教師が使う英語に関する情報源を探し求め、見つかった言語情報を活用して自分の英語を作り上げていく点に焦点を当ててみたいと思ったからである。すでに述べた通り、これらを活用するためには、教師自身が教室での活動を振り返り、自身の言語的ニーズを意識し、言語的資料を用いてアクティブに習得を実行することが肝要である。何でも自分の言葉にしていく旺盛な意欲や言語所有者意識が必要となる。

多くの教師が最初に見たような教室英語のハンドブックから始めるとすれば、他種の資料によって単一文より長い単位となる児童生徒とのやりとりや教師のモノログに接することができることを示した。また、映像を通して音声情報を取得することができるだけでなく、教室での活動形態や教育面での文化的特徴について知るきっかけともなることを見た。従って、私達が言語面だけではなく教育者として発想や教室での実践をより豊かなものにしていくのにも役立つだろう。資料をもとに個々の教師がどのように自身の教室での言語行動を作り上げていくのか、そのダイナミックな過程の究明はこれからである。

本研究では教師が教室で使う英語に焦点を当てたために照射できなかった事柄がある。ひとつは、英語教師として基礎的な英語力を高めるために用いる方法という問題であり、現在、英語の話者と実際に定期的にコミュニケーションやディスカッションができるプログラムがインターネット上で提供されていることに注目しておきたい。また、実際の教室において教師自身の英語による言語行動を活発で達者なものにしていくことは重要だが、同様に児童生徒や学生の言語行動がより活発になるよう促していく必要がある。英語の国への留学などによって比較的流暢に英語が使えるようになった児童生徒や学生とのコミュニケーションは容易であり、楽しいものでもあ

るが、そうでない児童生徒や学生が大半だとすれば、いかに毎回の授業を通して彼らの口頭コミュニケーション能力を高めていけるのかという難題を避けて通ることはできない。これらについても機会を見つけて考察してみたい。

注 1) https://www.springfieldspringfield.co.uk/movie_script.php?movie=front-of-the-class

謝辞

本稿は、2020年1月4日に新英語研究会北信越ブロック集会で発表した内容をもとに作成したものである。発表を聞いて下さった研究会の皆様と、動画と映画の SCRIPT 作成に際してお世話になった本学現代社会学部のフランク准教授に、感謝を申し上げたい。

引用文献

秋田裕子 (2011) 『これ一冊でできる小学校英語活動 基本編 新学習指導要領対応』 径書房

İnceçay, G. (2010) “The role of teacher talk in young learners’ language process.” *Procedia Social and Behavioral Sciences 2*. Elsevier Ltd.

小泉清裕 (2011) 『[小学校]英語活動ネタのタネ』 アルク

熊本大学教育学部附属小学校 (著) (2011) 『小学校英語活動 365 日の授業細案—すぐ使えるゲーム&イラスト集』 明治図書

Slattery, M. and J. Willis. (2001) *English for Primary Teachers: A handbook of activities & classroom language*. Oxford University Press.

Slattery, M. and J. Willis (原著) 外山節子 (日本語版監修) (2003) 『子ども英語ハンドブック』 旺文社

曾根田憲三・ブルース・パーキンス (2002) 『教室で使う英語表現集』 ベレ出版

染矢正一 (1994) 『教室英語表現事典』 大修館書店

Hirschel, R. (2018) “Teacher Talk in the Elementary School EFL Classroom.” 崇城大学紀要 第43巻

Hughes, G. S. (1981) *A Handbook of Classroom English*. Oxford University Press.

Feynman, R. P. (1985) “*Surely You’re Joking, Mr. Feynman!*” Bantam Books.

ファイマン R. P. (原著) 大貫昌子 (訳) (1986) 『「ご冗談でしょう、ファイマンさん」I』 岩波書店

Fukushima, M. (2015) “Teachers’ Approaches to Elementary School English: An Analysis of Teacher Resource Books Recently Published in Japan.” 富山国際大学子ども育成学部紀要第6巻

Bolitho, R. (2008) “Teacher Talk and Learner Talk.” European Centre for Modern Languages: <http://archive.ecml.at/mtp2/GroupLead/results/Lucru/4/Rod.pdf#search='Bolitho+R.+Teacher+Talk+and+Learner+Talk'>

文部科学省 (2017) 「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」:

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2017/07/07/1387503_1.pdf

Lei, X. (2009) “Communicative Teacher Talk in the English Classroom.” *English Language Teaching* Vol. 2, No. 1:

<http://www.ccsenet.org/journal/index.php/elt/article/view/338>

山崎祐一 (2017) 『先生のための 授業で1番よく使う英会話』(小学校 楽しい英語授業をつくるシリーズ) Jリサーチ出版

吉田研作 (監修) (2010) 『小学校英語のための英語ゲームはこれだけ!』アルク